

しまなみ 一期一会

ライアン・モナハン

僕は、日本に来て1年半ほどになりますが、それまではサイクリングにそれほど興味を持ったことはありませんでした。しかし、今治に来て、車を持たなかった僕は中古のロードバイクを購入し、すぐにサイクリングに夢中になりました。この1年半の間に、四国中を自転車で旅しました。もちろん、しまなみ海道も走りました。10月30日にしまなみ国際サイクリング大会が開かれると知ってすぐに参加を決め、5つのコースのうち最も距離の長い150kmのコースにチャレンジすることにしました。およそ3500人のサイクリストと共に走りました。そんなに大勢の人々と一緒に走るというのは、僕にとってとても貴重な経験で、忘れられないイベントとなりました。

大会当日のハイライトは、まだレースが始まる前の朝7時15分にやってきました。私と同じコースに参加する人たちが、開会式のためにスタート地点に集まっていた時のことです。ありがたいことに、司会の方が外国人参加者のために全て流暢な英語で通訳してくれました。何人かの来賓の方々のスピーチの後、司会の方が参加者にインタビューするために、スタート地点の方にやって来ました。最前列近くにいた外国人（つまり僕）に気付いた彼は、僕にマイクを向けたのです。いくつか質問されたのですが、最後に「あなたの好きな日本語の言葉は何ですか？」と聞かれました。言葉と言うよりはことわざになると思うのですが、僕はためらわず、「一期一会」と答えました。この言葉を知らない人のために説明します。「一つの瞬間、一つの出会い」あるいは、「一生に一度の出会い」というのが文字通りの意味です。全ての出会いは、そのとき一度きりのものだから、一つ一つの出会いをそれぞれ特別なものとして大切にしよう、という意味を持つこの言葉が僕は大好きです。近くにいた参加者たちも、明らかに思いを共有してくれたようで、僕がその言葉を言い終えると一斉に「あ～！」という声が、僕の周りであがりました。その日のサイクリング自体が、それに関わる全ての人々にとって本当に一期一会のイベントであり、みんな、これから経験することに感謝しましょうと、司会の方がまとめて下さいました。

その日、僕はその思いを胸に自転車を走らせました。しまなみ海道は何度も走ったことがありましたが、今、ここ、このときを大切に走ろうと決めて走りました。橋からの息を呑むような景色、明るく晴れ渡った暖かな天候、そして、なめらかな路面を滑るように走る感覚を、僕は深く味わいました。しかし、中でも一番ありがたいと感じたのは、共にコースを走ったサイクリストの皆さんの存在でした。開会式でのインタビューのおかげで、僕に気がついてくれる人が何人もいました。大勢の参加者の中で外国人であるがゆえに目立っていたであろう僕の口から「一期一会」という言葉が出たからではないかと思います。休憩所エリアで僕のそばを通るときなどに「一期一会さん！」とか「一期一会くん！」と声をかけてもらいました。急いでコースに戻りたい場合でなければ、僕の限られた日本語と、皆さんの限られた（たまにビックリするほど上手な）英語とで少し会話を楽しんだりもしました。もちろん、僕を「一期一会さん」だと知らない人も、親切で協力的でした。励ましてもくれました。「がんばって！」という声や、コースの難所を抜けた後のよくやったという声援を送ってくれる人、ただうなずきながら微笑を向けてくれる人、そういった皆さんのおかげで、僕たちサイクリストは、見知らぬ者同志の集団というより、固い絆で結ばれたお互いに支えあう共同体のように感じながらその日を過ごしました。

その感覚は、僕にとっての日本の真髄、つまり、一期一会の精神そのものでした。今治市内の学校で働く中で、あるいは、日本国内を旅する途中で、僕はたくさんの人に出会います。その後二度と会うことがない人もいます。みなさん、出会いを慈しみ、相手と共に過ごす時間を大切にしているように思います。この素晴らしい日本という国で出会った人々はみな、僕と過ごす時間に100%を注いで、僕を理解しようとしてくれるように感じます。そして、僕もまた相手を理解しようと努めます。常にそういう態度であるよう僕は心がけています。日本に来てわずか1年半ですが、僕の人生に登場してくれたたくさんの素晴らしい人々と過ごす一瞬一瞬を大切にすることが、よりわかるようになってきたように思います。たった一度きりの出会いになるのか、一生続くご縁になるかはわからなくても、一つ一つが大切な出会いであることに変わりはありません。一期一会という言葉は、だから、単に言葉というよりは、やはり、ことわざなのだと思います。それは生き方を示すものです。しまなみ国際サイクリング大会に参加した日は特別な日でしたし、一緒に参加されたみなさんには感謝と賞賛の意を表したいと思いますが、それと同じくらい素晴らしい日々を、素晴らしい瞬間を、僕たちは過ごしていますよね？

訳：小越二美 (Fumi Kogoe)